

## 伊丹市昆虫館友の会「いたこんくらぶ」の活動について

藻川 芳彦\* 坂本 昇\*\*

### 要 旨

伊丹市昆虫館友の会は、伊丹市昆虫館と積極的に関わり、個々の知見を深める組織として発足した。友の会会員の中学生・高校生といったジュニア世代の数名が、通常の友の会行事には飽き足らず、より専門的な活動を行いたいと希望して「いたこんくらぶ」なるグループを組織した。

その活動概要を紹介し、次代を担う世代の育成について、課題を含め報告する。

### キーワード

博物館 友の会 ジュニア世代 活動の多様化

### はじめに

伊丹市昆虫館（以下昆虫館）は、「私たちの身近に暮らす昆虫たちとふれあい親しむことで、多様な生命に気づき、自然の大切さや環境の変化を感じる人を育てる」をコンセプトに、自然学習の拠点施設として、1990年11月10日に開館した博物館法による博物館相当施設である。また、2013年4月1日からは、公益財団法人伊丹市文化振興財団が指定管理者となり、運営にあたっている。

昆虫館と連携し、「深く昆虫館と関わり、昆虫や自然への学びを（楽しく）深めよう」とする人々の集まりとして、伊丹市昆虫館友の会（以下友の会）が2004年1月1日に発足した。2016年12月31日現在の会員数は399名で、老若男女・昆虫に興味を持ち始めた初心者からプロ級の知識を持つ人まで、幅広い会員層が在籍し、それぞれのレベルで活動を楽しんでいる。運営は、正副会長を含め24名の運営委員が役員として、昆虫館の学芸スタッフと協働して行っている。具体的には、年10回程程度の観察会・採集会・講座等の行事を開催し、会員の研究成果の展示・発表、年2回の会報（友の会ニュース）の発行等を行っている。

### いたこんくらぶの発足

友の会の諸活動（行事）が軌道にのってくると、通常の

行事に飽き足らない中学生のグループから、より専門的な活動を行いたいとの意思表示が出された。そのため、友の会運営委員会で検討を行い、試行期間を経て、2008年1月14日から、中学生・高校生対象の「いたこんくらぶ」を発足させた。

この「いたこんくらぶ」の当初の中心メンバー（発起人）は、いながわ探検隊・たんば探検隊・いたこん探検隊という名称で、友の会行事（当初は昆虫館行事だったが、後に共催）として実施していた小学5年生以上高校生までの子どもたち対象の宿泊を伴う調査・採集会に、常連のように参加していたベテランたちであった。

この探検隊は、友の会と昆虫館の共催とし、2泊3日の日程での集団生活の中で、本格的な昆虫調査、灯火調査、水生生物調査、標本作製等を昆虫館学芸員や友の会役員の指導・監督のもとに行う行事であった。事後には、班ごとの成果発表やベテラン隊員たちの個人成果の発表を行う実施報告会を行い、事前には、友の会行事の自然観察ハイキング、調査観察会、標本作製講座に出席し、予行演習を行うことを義務づけていた。なお、探検隊は、会員からの要望等もあり、2009年度から「いたこん合宿」と名称を変え、参加者の年齢制限を廃止し、家族での参加を原則としたものになり、友の会の人気行事の一つとして定着している。

\*伊丹市昆虫館、伊丹市昆虫館友の会運営委員 \*\*伊丹市立生涯学習センター、伊丹市立図書館南分館、伊丹市昆虫館



図1. 川西市黒川での採集会の様子(撮影:大塩拓美)

いたこんくらの活動内容は、自主調査会(図1)、勉強会、他の博物館施設等の見学、各種発表等である。それらを行うことで、探検隊では体験できないような専門的な活動を行うこと、探検隊行事期間外にも、定期的に活動する機会を設けることを目的としている。

発足にあたって、自発的に活動できる経験を持った中学生・高校生たちが学校の枠を超えて集い、自主的なかたちで昆虫や自然を対象に活動するグループと位置づけ、友の会と昆虫館は場づくり、運営のサポート、時には共に活動する仲間という立場で関わっていくようにした。とはいえ、未成年の活動であることから、昆虫館の学芸スタッフと友の会役員をそれぞれ1名ずつ担当者とし、指導・監督等を行えるようにした。

結成当初は、活発な活動を続けていたものの、いたこんくらのメンバーの学年が上がり、高校受験や大学受験が間近に迫ると活動が下火になり、当初のメンバーに続く人材の加入もなく、2~3年ぐらいで休眠状態となった。また、担当者とした学芸員に過重な負担がかかったことも問題となった。



## いたこんくらの再発足

友の会も発足後10年を経過すると、会員の年齢層や構成メンバーも変化し、小学生を中心とした家族での会員が増えてきた。2014年になって、当時中学1年生の複数の会員から、もっと本格的に活動を行いたいという申し出が自然発生的に出てきたため、友の会運営委員会で検討の上、2015年から、新たなメンバーで本格的な活動を再開した。

再開した「いたこんくらぶ」の基本的スタンスは、2008年の発足当初の内容を踏襲している。ただし、前回の反省を踏まえて、指導・監督等については、昆虫館の学芸スタッフと友の会役員の全員で担当することとし、「いたこんくらぶ申し合わせ」、「いたこんくらぶ自主活動(昆陽池公園園生きもの調査)に関する要項」等を定め、毎回の活動の報告・記録用紙を作成し、指導する者全員が活動の状況を一定のレベルで把握できるようにし、友の会役員1名がその窓口として調整を行っている。

再開した「いたこんくらぶ」のメンバーも、当初の「いたこんくらぶ」メンバーと同様に、何度か宿泊行事である「いたこん合宿」に家族で参加し、その後、高学年になり単独で合宿に参加して鍛えられたベテランたちである。

いっぽう、再開した「いたこんくらぶ」のメンバーの家族(保護者ら)は、子どもだけが参加していた「探検隊」とは異なり、合宿を含めた友の会行事に積極的に参加しているため、子どもたちの活動に理解があると同時に、友の会役員や昆虫館学芸スタッフとも意見交換が容易な関係にあるという点が特筆される。それによって、再開の際のルール作りや家庭とのやりとりが、昆虫館・友の会役員・各家庭との間で協力的に行え、グループを支える体制が強固になった。



図2, 3. 昆陽池公園(ピオトープ)でのライトトラップ調査の様子

現在は、登録しているメンバーは8名にすぎないが、全員で昆陽池公園の昆虫相の調査(図2, 3)を行うことを活動のメインにおき、その他、各自の好みのフィールドやテーマを設定し、単独或いは合同での調査を行っている。彼らが、昆陽池公園の昆虫相の調査をメインに据えていることは、昆虫館や友の会にとっても有益なことである。昆虫館と友の会は、①2012年3月に出版した「伊丹市昆虫館収蔵資料目録-昆陽池公園の昆虫」(伊丹市昆虫館発行、執筆者は学芸スタッフ全員)。②昆虫館学芸スタッフと友の会役員の有志で編集した「昆陽池公園の昆虫観察ガイド」(2011年3月発行、コベルコ自然環境保全基金助成事業)や「昆陽池公園の自然観察ガイド」(2013年3月発行、一般財団法人セブンイレブン記念財団助成事業)を刊行している。これら①・②の事業の後を受け、次の事業を展開する上で、いたこんくらぶの調査活動は、資料収集の一助ともなると思料している。

また、いたこんくらぶのメンバーの中には、兵庫県立人と自然の博物館の「ユース昆虫研究室」や「テネラル」、大阪市立自然史博物館の「ジュニア自然史クラブ」といった同じような組織にも参加しているメンバーがいる。これらの3団体は、いたこんくらぶとは比較にならないほど活発で専門的な活動を行っており、その活動で鍛えられたメンバーが、いたこんくらぶの活動を主導して行ってくれることも期待している。

「いたこんくらぶ」のメンバーは、友の会行事において年を重ねるごとに増えてきた小学生の会員たちと共に活動することが多くなっており、彼らには、友の会行事で、小学校低学年の子どもたちに昆虫採集等自然との関わり方をイロハから教えていく存在になってほしいと考えている。そして、現在の小学校高学年の会員が中学生になった時点で、いたこんくらぶに加入する道筋がひかれていくことになるといっても過言ではない。

## さいごに

昆虫に対しては、子どもたちの関心は高いものの、主体は小学生以下の子どもたちであり、中学生以上になると、「まだ虫捕りをやっているの」という目で見られ、肩身の狭い思い(?)をしている子どもたちがいるのではと思うが、それでも昆虫をあきらめられない中学生以上の子どもは一定数存在しているものとする。友の会はそのような子ど

もたちの受け皿であり、「いたこんくらぶ」は、友の会会員の中で自発的な活動ができる中学生や高校生が、学校の枠を超えグループとして活動することで、昆虫や自然が大好きな仲間と出会い、交流し、成長しあい、それが、継続的に昆虫館友の会の活動につながり、伊丹市昆虫館に関わるユーザーコミュニティとして、昆虫館の資源を継続的に活用してほしいと考えている。

加えて、友の会の総会時に行っている、会員の研究成果の発表・展示については、昆虫館のプチ展示「友の会会員の研究発表」で一般の来館者の方々の目に触れるため、いたこんくらぶメンバーの成果発表等が、自らの成果を発表できる機会として機能するだけでなく、友の会の存在を周知し、自然が好きな小・中学生の活動の場を提供できる一助となってほしいと考えている。

また、大人になってゆく段階で、昆虫に関心がない、または嫌う人と出会い、昆虫採集(虫捕り)は恥ずかしいという気持ちが出てくるかもしれないが、大人でも好きな人は、趣味として公言してもよいと筆者らは考えている。東京大学名誉教授で脳科学者の養老孟司氏が「ぼくは虫捕りが好き」と公言されているのに勇気づけられ、尊敬の念を禁じ得ないのは筆者たちだけではないと思われる。

いっぽう、今後の方向性を考えるとき、テーマを与えて育成を図っていくのか、自主的な活動に任せるのか(自由放任ではなく)、昆虫館や友の会の支え方については、方針が定まっているわけではない。また、高校生ぐらいになると、そうでなくても学年が上がるにつれて、博物館に来ていた子どもたちが離れていく可能性もあるが、それに対して、どの様に向き合ってゆけばよいのか、博物館に関わって行く人を減らしたくないという理由で、無理に引き留めるか否かも含め悩ましい問題である。

この件に関しては、2015年11月28-29の両日、大阪市立自然史博物館で開催された「友の会サミット2015」にて、昆虫館の奥山館長と友の会役員として筆者の一人藻川が、コミュニティの発展・維持のためにはヒト(人材)の確保・育成がかかせないと論点で事例発表を行ったが、「いたこんくらぶ」の育成・運営に関しては、いまだ試行錯誤の状況から抜け出せないでいる。

ただ、最初の「いたこんくらぶ」のメンバーのうち、数名は、大学の学部や大学院で昆虫学に関連する専攻分野に進学していることから、彼らの興味・関心を維持する場として

寄与していた可能性があるのではないかと捉えることもでき、そのことが「いたこんくらぶ」の存在意義の一つの証左となろう。